

金沢大学附属図書館蔵暁鳥文庫本『伊勢物語首書抄』翻刻(四)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/32531

金沢大学附属図書館蔵曉烏文庫本

『伊勢物語首書抄』翻刻（四）

村戸弥生

はじめに

本文翻刻

本稿は延宝二（一六七四）年刊本『伊勢物語首書抄』下冊（第四九段から第一二五段）の第六九段から第八六段までの翻刻であり、「翻刻（一）」『市民大学院論文集』第3号、二〇〇八年三月刊（上冊第一段から第二〇段）、「翻刻（二）」同第4号、二〇〇九年三月刊（上冊第二段から第四八段）（以上は二〇〇七年度、二〇〇八年度の金沢大学市民大学院テキスト文化学専攻日本文学研究ゼミの成果）、「翻刻（三）」『金沢大学国語国文』第36号、二〇一一年三月刊（下冊第四九段から第六八段）に引き続きものである。翻刻にあたってはこれまで同様、金沢大学附属図書館蔵曉烏文庫本を底本に用い、不明な箇所は同版の石川県立図書館李花亭文庫本により補う。「底本書誌」【凡例】は「翻刻（一）」の記述によられたい。

（第六九段）

六十九

昔、男有けり。その男伊勢の国に、かりのつかひにいきけるに、かの伊勢の齋宮なりける人のおや、つねのつかひよりは、此人よくいたはれといひやれりければ、親の事なりければいとねんごろにいたはりけり。あしたには、かりにいだしたて、やり、ゆふざりはかへりつ、そこに、こさせけり。かくてねんごろにいたづきけり。二日といふ夜、男われてあはんといふ。女も、はた、いとあはじとも思へらず。されど人めしげ、れば、えあはず。つかひざねと、ある人なれば遠くもやどさず。女のねやもちかく有ければ、女、人をしづめて、ねひとつばかりに、男のもとにきたりけり。男はたねられざりければ、とのかたを見いだしてふせるに月のおぼろなるに、ちいさきわらはをさきにたて、人たてり。男いとうれしくて、わ

がぬる所に、ゐで入て、ねひとつより、うしみつまであるに、まだ何事もかたらはぬにかへりにけり。男いとかなしくて、ねず成にけり。つとめていぶかしけれど、わが人を、やるべきにしあらねばいと心もとなくて、まちをれば、あけはなれて、しばしあるに女のもとなり、ことはなくて

吉会君やこし我や行けんおもほえず夢かうつ、かねてかさめてか男いと、いたうなきてよめる

回かきくらす心のやみにまどひにき夢うつ、とは今夜定めよと、よみでやりて、かりに出ぬ。野にありけど、心はそらにて、こよひだに、人しづめて、いとくあはんと思ふに、国のかみ、いつきの宮のかみかけたる、かりのつかひ有と聞て夜ひとよ、さけのみしければ、もはらあひごともしえせであけば、をはりの国へたちなんとすれば、男も人しれすちの涙をながせど、えあはず、夜やうくあけなんとする程に、女がたよりいだすさかづきのさらに歌をかき出したり。とりて見れば

かち人のわたれどぬれぬえにしあれば

と、かきて、すゑはなし。その盃のさらに、ついまつすみして、歌のすゑをかきつぐ

まだあふさかのせきはこゑなむ

とて、明ればをはりの国へこえにけり。齋宮は水の尾の御時、文徳天皇の御むすめ、これたかのいもうと。恒子内親王
六十九 かりの使に……昔は諸国へ鷹狩させんために勅使をたたられし也。国の治民のうれへを聞ん為也。

○齋宮成ける人のおや 齋宮は恒子内親王也。おやは名虎がむす

め静子也。

○ねんごろにいたづき おやいひおこせし故念比也。

○二日といふに 業平のくだりて二日めの夜也。

○われてあはん わりなく也。

○女もはたあはじとも おさなくより齋宮に立給へば、夫婦のか

たらひを知給ねば、あはんとあふまじきとも知給ざる也。

○つかひさね しかるべき人也。勅使なればつねの所にもおか

ず、齋宮のねや近くおき給ふ成べし。

○ねひとつばかり 一時を四つに分てその一つ也。ねのときはじめ也。

○男はたねられざりければ 齋宮の事を思ふ也。

○ゐで入て 業平のね所にさそひ行也。

○ねひとつよりうしみつ ねの時うしの三更まで也。

○まだ何事も…… 其折のてい也。

○ねずなりにけり それより業平ねもせぬ也。

○つとめていぶかしけれど 我人をゆるるべきにもあらねばは、かりてやすらふ心也。後朝のふみを待てよの明るさま也。

○つとめては、後朝也。

○いぶかしは、心もとなく思ふ也。

○詞はなくて 文に歌ばかり書給ひて、詞はなき也。

○君やこし…… 此歌は君や我方に来けん、我や行けんしらざる也。たゞ夢のやうに覺りと也。

○いたうなきて此歌をみてたゞ 忙然としたるてい也。

○かきくらす…… 君やこし我や行けんといへる事、我も何とも覺

ず、夢かうつ、かを夜あふてさだめよと也。

○国のかみいつきのみやのかみかけたる 国司などを言。かみか

けたるとは齋宮の頭を兼たるもの也。其所の代官などをいふ也。

○さけのみしければ 業平勅使なれば、司のもの共きたりてもて
なす也。

○もはら もつはら也。

○あひごともえせで こよひ又あはんと思ふに、さはり有てえあ
はず。それよりをはりの国へ行也。

○ちのなみだ ふかくかなしき心を言也。

○さかづきのさらに さかづきのしたがさねに歌を書いて、齋宮よ
り出し給ふ也。

○かち人のわたれどぬれぬえにしあれば 上の句ばかりを書た
り。あさきえんといはん為也。かち人のわたりにぬれぬは、いかに
もあさき渡也。

○ついまつすみ たいまつすみ也。其ともしびさしのきえす
みにて書つぐなり。

○又あふ坂の関はこえなん かくあさきえんと思食共、又あふこ
とも有べきぞと也。

○とて明れば…… これより物語の地也。さきの事を注したり。

(第七〇段)

七十

昔、男かりのつかひより、かへりきけるにおほよどのわたりに、
やどりて、いつきの宮のわらはべにいひかけける

新古今みるめかるかたやいつこそささして我にをしへよ蛭の

つり舟

七十 狩の使より帰…… 前の段と同じ時分也。

○おほよどのわたり 尾はりの道也。

○いつきの宮のわらはべ 齋宮にめしつかふ女童也。業平をを
くりてやりたる成べし。

○みるめかるかたや…… 齋宮を今一度見奉らん事を我にをしへよ
と也。彼宮のわらはべなればかくいへる也。小野篁がはい所に
いたるとて、和田の原八十嶋かけてこぎ出ぬと人にはつけよあまのつ
り舟といへるおなじ心にや。

(第七一段)

七十一

昔男伊勢の齋宮に、内の御つかひにてまいれりければ、かの宮に、
すぎこといひける女わたくしごとにて

拾遺ちはやふる神のいがきもこえぬべし大宮人のみまくほしさに

おとこ

恋しくはきてもみよかしちはや振神のいさむる道ならなくに

七十一 内の使にて 内裏の勅使と也。

○すぎこといひける 数寄事也。わたくしごとに業平にままめく
也。

○ちはやふる…… 神のいがきはこえん事にあらね共、業平を見ま
ほしきと也。いがきをこゆるは法度をやぶりても行度といふ心也。

大宮人は雲の上人と言、同じ業平の事也。

○恋しくは…… 恋しくはこなたへきてもみよかし、神のいがきを
こゆる共、くるしからじ、男女のまじはり神こそはじめ給へとな

り。いさむる道ならなくとは、神も制する道にもあらずと也。

(第七二段)

昔おとこ伊勢の国なりける女、またえあはで、となりのくにへいくとて、いみじうらみければ、女

新古今大淀の松はつらくもあらなくに恨てのみもかへる波かな

七十 伊せの国なりける女 齋宮也。となりの国は尾張国也。前段同。

○大淀の松はつらくも…… 大よどは伊せ国也。此浦に松有、其本に波のよせかへりくするは、松はとがもなけれ共、恨あるやう也。され共松はつらくもなしと也。業平の我をいみじうらみらるれ共、我にうらみんことはなしと、松と波とによそへていへる也。

(第七三段)

七十 昔そこにはありときけど、せうそこをだにいふべくもあらぬ、女
のあたりを思ひける

万葉めには見て手にはとられぬ月の内の桂のごとき君にぞ有ける

七十 せうそこをだに せうそこは文などにもかぎらず、をとづれの事をもいふ也。詞をもかはさぬ心也。

○めにはみて手には…… 月のかつらに女をたとへたり。めには見ながら手にとられぬ物也。よきたとへなり。

(第七四段)

七十四 むかし、男、女をいたううらみて

同岩ねふみかさなる山にあらね共あはぬ日おほく恋渡る哉

七十四 岩ねふみかさなる山は せんざんばすい 千山万水をへだて、も心のかよふ道あればあふ事あり。我中には山川をもへたてざれ共、あはずして恋わたると也。

(第七五段)

七十五

昔、男伊勢の国にゐていきで、あはんといひければ女

大淀のはまにおふてふみるからに心はなぎぬかたらはねどもと、いひて、ましてつれなかりければ男

袖ぬれてあまのかりほすわたづ海のみるをあふにてやまんとやする

女²

岩間より生るみるめしつれなくはしほ塩みちかひも有なん

又男³

泪にぞぬれつ、しほる世の人のつらき心は袖のしづくか
世に、あふことかたき女になむ。

七十五 むきてあらん 我身を引てすまんと也。

○大よどのはまに…… 見るからといはんとて、はまにおふてふとはいへり。なぎぬは、心はなぐさみぬと也。心のやはらぎたると言心也。かたらはねどもとは、かたらはざれ共みるばかりにて、心はなぐさむと也。

○といひてまして…… かくいひても打とけもせぬ心也。

○袖ぬれて…… 序歌也。みるをあふ事にしてやまんとするか、わが心はあひみたるばかりにては、あやむまじきと也。

○岩まより…… みるは岩間いはまより生る物なればかくいへり。みるめしつれなくとは、みるはみどりの色にてたがはぬ物也。其ごとく我心さへたがはずあるならば、そなたの心の塩しほひ塩しほみつ、かやうにかはる事有共、こなたにはとりあはしと也。

○なみだにぞ…… わが袖はしほのみちひにはぬれず、そなたのつらき心が袖のしづくと成てしほと也。

○世にあふ事かたき…… 一度あひての後はつぬにつれなかりし也。齋宮の御事也。

- 1、「あはん」は「あらん」とあるべき。
- 2、原文小書。
- 3、原文小書。

(第七六段)

七十六

昔二条の後の、まだ春宮のみやずん所と申ける時、氏神にまうで給けるに、このあつかさにさぶらひける、おきな人々ひとびとのろく給はるついでに、御車より給て、よみてたてまつりける

古今大原や小塩の山もけふこそは神代のことと思ひいつらめ

とて、心にもかなしと思ひけん、いかゞ思ひけんしらずかし。

七十六 春宮のみやす所 春宮の母儀を言也。

○氏神は、大原野の社也。

○このあつかさ 業平也。

○ろく給はる 后宮行啓には必祿を被下也。

○大はらや…… みやす所行けい有ほどに、神も天照太神と春日明神のちぎり給ひし君臣のむかしを思ひ出すらんと也。その心は二

条後のたゞう人の御とき業平かよひし事をおぼしめし出すやと也。神代とはむかしの事也。

○とて心にもかなしと…… 物語の地のひはん也。

- 1、「みやずん所」は原文のまま。

(第七七段)

七十七

昔田むらのみかと、申御門おはしましけり。其時の女御たかきと申す、みまそかりけり。そのうせ給ひて、安祥寺にて、みわざしけり。人々さ、げ物奉りけり。奉りあつめたる物、ちさ、げばかり有。そこばくのさ、げ物を、木の枝に付て、堂の前にたてたれば、山もさらに、堂の前にうごき出たるやうになんみえける。それを右大将にいまそかりける、藤原のつねゆきと申す、いまそかりて、かうのをはる程に歌よむ人々ひとびとをめしあつめて、けふのみわざを題にて、春の心ばへある歌奉らせ給ふ。右のむまのかみなりける翁、めはたかひながらよみける

山のみなうつりてけふに逢ことは春のわかれをとふと成べし

と、よみたりけるを、今みれば、よくもあらざりけり。そのかみは、

これやまさりけん、あはれがりけり。

七十七 田むらのみかと 文徳天皇の御事也。

○たかきこ 多賀幾子、西三条右大臣良相の女也。

○うせ給て 天安二年十一月四日にうせ給ふ也。

○安祥寺 山科のさとにあり。

○みわざ 御とふらひあるなり。

○人々さ、げ物 御とて御願の時、宮に公卿殿上人まいらす

る物を金のうち枝に付、又は木のえだに付る也。

○そこばく いくばく也。おびた、しくさ、げ物の有し也。

○山もさらに堂のまへに 山もにはかにうごき出ばかりに、しやうにみゆる也。

○つねゆき たかきこの兄也。右大将は正二位也。

○かうのをはる その御とぶらひの法事のをはり也。

○右のむまのかみ 業平。

○めはたかひながら 山のうごき出たるやうに見えたるといふは、業平のめはたかひながらと言心也。

○山のみなうつりて…… 山もけふの別ををしてみてしたふかと也。

うつりてはこなたへよる心也。数々のさ、げ物山のごとく成を、此山もけふの別悲しぶにやと也。

○いまみればよくも…… 業平のみづから書る詞也。此歌を後にみればをとりたり。其時はよかりしやらん、人のあはれがりけるとなり。

1、「みかとゞ」は「みかど、」とあるべき。

2、「四日」は「十四日」とあるべき。

3、「正二位」は存疑。

(第七八段)

七十八

昔たかきこと申す女御おはしましけり。うせ給ひて、な、七日のみわざ安祥寺にてしけり。右大将藤原のつねゆきといふ人いまそかりけり。其みわざにまうで給ひて、かへさに山しなのせんじのみこ、おはします。其山科の宮に瀧おとし、水はしらせなごとして、おも

しろく作られたるに、まうで給ふて、年比よそにはつかうまつれど、ちかくはいまだつかうまつらず。こよひは、爰にさふらはんと申給ふ。みこよろこび給ふて、よるのおましのまうけさせ給ふ。

さるにかの大将出てたばかり給ふやう、宮づかへのはじめに、たゞなをやは有べき。三条のおほみゆきせし時、紀の国の千里のまにありけるいとおもしろき、石奉れりき。おほみゆきの後奉れりしかば、ある人の、みざうしの前のみぞにすへたりしを鳴ごのみ給ふ君なり。此石を奉らんと給ひて、みずいじん、とねりして、とりにつかはす。いくばくもなくてもてきぬ。この石聞しよりは、みるはまされり。これをたゞに奉らばす、る成べしとて、人々に歌よませ給ふ。右のむまのかみなりける人のをなん、あをき苔をさざみてまき糸のかたに此歌をつけてたてまつりける

あかね共岩にぞかふる色みえぬ心を見せんよしのなければとなんよめりける。

七十八 此段前と同じ。

○山しなのせんじのみこ 仁明天皇御子人康親王也。貞観元年

に出家し給。此ゆへにせんじのみこといふなり。

○年比よそにはつかうまつれど よそには聞及べどもいまだみずと也。

○みこ せんじのみこ也。

○よるのおましのまうけ 夜御席也。よるのね所などの事也。

○たばかり給 思案し給ふ事也。

○宮づかへの初 此所に来臨の初なれば何をか進上すべきと案じ給ふ也。

○たゞなをやは、直なまの字也。よしもなく、すぐにてはいかがと也。
○三条のおほみゆきせし時 西三条良相よしかよの亭ていへ清和天皇行幸有し時也。

○みざうし 御曹司也。つばね也。

○しまごのみの君 つくり庭などすき給みなれば、此石を参せんと也。

○みぎのむまのかみ 業平也。

○あをきこけをきざみて…… 石ばかりをたゞ参せてはけうあるまじとて、業平の歌をあをきこけをきざみて、まきゑをしたるやうにつけたると也。

○あかねども…… あかね共とは、何事をして参せてもあきたらね共、事たらぬ也。あかね事は不足也。されば岩をまいらせんと思ほどに、我心ざしを岩にかえてまいらすと也。それにも猶あかねと也。

(第七九段)

昔、氏の中に、みこ生れ給へりけり。御うぶ屋に人々ひと歌よみけり。御おほちがたなりけるおきなよめる

我門にちいろあるかげをうへつれば夏冬誰かかくれざるべき
是はさだかずのみこ、時の人、中将の子となんいひける。あにの中納言行平のむすめのはらなり。

七十九

氏の中に 在原行平のむすめの腹に、さだかす親王生れ給ふ事也。

○御おほちがた 貞数さだかずの母は業平の姪めいなれば、御おほちがた也。

おほちは行平也。

○我門にちいろある…… 我門は我一家と言儀也。ちいろ有かげは、寿命めいづをいのる心也。仙家せんかの竹の事也。竹は内空うちぞらにしてすぐなれば、王道わうだうの心にいへり。夏冬はあつくさむき比也。此時も此かげにみばうれへもなからんと也。

○是はさだかずのみこ…… まへを注ちしたる詞也。

(第八〇段)

八十

昔おとろへたる家に、藤の花うへたる人有けり。弥生のつごもりに、其日雨そほぶるに、人の許へ折て奉らすとよめる

古今ぬれつ、ぞしみて折つる年の内に春はいくかもあらじと思へば

○おとろへたる家 業平わが家を卑下ひげして也。

○折て奉らす 誰か方へやる共なし。

○ぬれつ、ぞしみて…… 雨をばぬれつ、といひ、藤をばしめて折つるといひて、雨共藤共いはざるは詞書にゆづりて言也。

○春はいくかもあらじと思へば 晦日に折てやればかくいへる事、尤面白し。

(第八一段)

八十一

昔、左のおほいまうち君きみ、いまそかりけり。かも川の辺がわに六条わたりに、家をいとおもしろく作りて住給ひけり。神無月のつごもりがた、菊の花うつろひさかりなるに紅葉のちぐさのみゆるおり、みこたちおはしまさせて夜一よ酒のみしあそびて、夜明もて行程に、

此殿のおもしろきをほむる歌よむ。そこに有ける、かたる翁、板敷のしたに、はひありきて、人にみなよませはて、読る

塩がまにいつかきにけむ朝なぎに釣する舟は爰によらんと
となんよみけるは、みちのくに、いきたりけるに、あやしくおもしろき所々おほかりけり。わがみかど六十よこくの中に、塩がまといふ所に、にたる所なかりけり。さればなん、かの翁さらに爰をめで、塩がまにいつかきにけんと読りける。

八十一 ひだりのおほいまうちぎみ 左大臣とほる也。

○いゑをいと面白く 六条川原院也。

○菊の花うつろひさかりなるに 菊の花のうつろひさかり成、くれなゐなとにうつろひ、又さかり成も有を言也。

○紅葉のちぐさのみゆる 色々にうすきこきてい也。

○かたい翁 かたくな成翁也。業平のひげのことば也。

○板じきのした 広えんの末座などにある也。

○塩がまにいつか……こ、を則塩がまのうらになして、我はいつのまに此うらにきたるぞ、つりする舟もこ、によれよ也。此おと、塩がまをうつされ面白き景氣をほめたる心也。

○となんよみける……是より下の詞上を尺する也。みちのくに、いきたりけるとは、業平にかぎらず、たれにてもかく思ふ成べし。

(第八一段)

八十二

昔これたかのみこと申すみこおはしましけり。山ざきのあなたに、水無瀬と云所に宮ありけり。年毎の桜の花ざかりには、其宮へなんおはしましける。其時右のむまのかみなりける人を、つねに

でおはしましけり。ときよへて久しく成にければ、その人の名わすれにけり。かりはねん比にもせで、酒をのみのみつ、大和歌にか、れりけり。今かりするかたの、なぎさのいゑその院の桜ことにおもしろし。其木の本におりあて枝を折て、かざしにさして、かみなかしも皆歌読けり。右馬のかみ成ける人の読る

古今世中に絶て桜のなかりせば春の心はのどけからまし
となん、よみたりける。又人のうた

ちればこそいと、桜はめでたけれうき世に何か久しかるべきとて、その木のもとには、たちでかへるに、日くれになりぬ。御供なる人酒をもたせて、野よりいできたり。此酒をのみてむとて、よき所をもとめ行に、あまの河といふ所に至りぬ。みこに、むまのかみおほみきまいる。みこの、給ひける、かた野をかりて、あまの川の辺にいたるを題にて歌よみで、盃させと、のたまひければ、かのみまのかみ、よみでたてまつりける

古今狩くらし七夕づめに宿からんあまのかはらに我はきにけり
みこ歌を返々ずし給ふて、返し、えし給はず。きのありつね、御ともにつかうまつれり。それが返し

古今一年に一たびきます君まては宿かす人もあらじとぞ思ふ
歸りて宮に入せ給ひぬ。夜更るまで酒のみ物語してあるじのみこ
あひて、入給ひなんとす。十一日の月もかくれなんとすれば、か
むまのかみのよめる

古今あかなくにまだきも月のかくる、か山のはにげて入ずもあ
らなむ

みこに、かはりたてまつりて、きのありつね

後撰おしなべて嶺もたひらに成な、ん山のはなくは月もいらじを

八十二 惟喬のみこ 前にあり。

○みぎのむまのかみ 業平。

○みでおはしましけり これたかのみこ業平をつれ年ごとにみなせの宮へ花みにおはします也。

○其人のなはわすれにけり 是作者の詞也。業平をたすけてかく書也。みぎのむまのかみといひて、業平といへば官のひき、をたすけて名をかくす也。

○かたの、なぎさの家 なぎさのゐん也。

○かみなかしも 月卿雲客、皆歌をよむなり。

○世中にたえて…… 春になれば花のいつかさかんと待、さけばそゞろにあくがれて思ひやり、うつろへば風雨に心をいたましめ、散はつれば名残をしたふ。是皆桜の有ゆへ也。世中に桜のたえてなくは春の心はのどかならんと也。

○又人の歌 有常が歌也。

○ちればこそ…… これは業平の余に花に着してよめるをおさへていへり。

○めでたければ、あいしたけれと言心也。散をこそ花はよけれ、浮世は盛者必衰のことほり也。それをみるは桜にありと也。

○みこにむまのかみおほみきまいる 業平酌をとる也。

○かりくらし…… あまの川といふ所なれば、此主は七夕づめにてあれば、日もくる、ほどに、やとを七夕つめにからんと也。

○みこかへしえし給はず 酒などにふかくあひ給也。有常返歌をする也。

○一とせにひとたび…… 七夕はひこほしにこそやどをかさんと侍べけれ、たゞの人にやどかすべからずと也。

○かへりて…… 水無瀬の宮に帰給ふ也。

○あかなくにまだきも…… 此みこ今ちとおはしませかしと也。山のはも遠くのきて月を人事なかれかしと月によそへいへり。

○をしなべて…… 山もなく平地になれかし、月もいらじをと也。

1、原文「あり。けり」。

(第八三段)

八十三

昔水無瀬にかよひ給ひし、これたかのみこ、れいのかりしにおはします、ともに右馬頭なる翁、つかうまつれり。日ごろへて、宮にかへり給ふけり。御をくりして、とくいなんと思ふに、おほみき給ひ、ろく給はんとて、つかはさゞりけり。此むまのかみ、心もとながりて

枕とて草ひき結ぶこともせじ秋のよとだにたのまれなくに

と、よみける。時は弥生のつごもり成けり。みこおほとこのもらであかし給うてげり。かくしつ、まうでつかうまつりけるを、思ひの外に御ぐしおろし給ふてげり。む月におがみ奉らむとて、小野にまうでたるに、ひえの山のふもとなれば、雪いとたかし。しあてみむろにまかうで、おがみ奉るにつれぐといと物がなしくて、おはしましければ、や、久しくさふらひて、いにしへの事なんと思ひ出て聞えけり。さてもさふらひてしがなと、思へどおほやけ事とも有ければ、えさふらはで、夕ぐれにかへるとて

古今忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみ分て君をみんとは

とてなん、なく／＼きにける。

八十三 れいの狩し いつも狩し給ふに業平を御供にめさるゝなり。

○日ごろへて宮に帰給ふ 京の宮に帰給ふ也。

○御をくりして みこを送奉りて也。

○とくいなん 業平とく帰らんと思也。

○おほみき給 酒を給也。

○心もとなかりて 御いとまたまはで我に御執心の御ていあるを不審したる也。

○枕とて…… こよひは草枕ひきむすぶ事をもすべからず、秋の夜こそながけれ、今は春のよなればみじかきに、ねずしてあかさんと也。

○おほとのごもらで みこのね給はであかし給也。

○かくしつ、 かくのごとく不斷しかう申なり。

○御ぐしおろし 惟喬親王貞親十四年七月に御出家し給ふ也。

○を野 をはら也。こ、に閑居し給也。

○みむろ をこなひをし給ふ御庵室也。

○つれ／＼と みこの住給さま也。

○さてもさぶらひてし哉 業平此ありさまをみ奉りて、其ま、ゐ

たき事に思へ共、清和の御門につかへ奉れば、思ふかひなき也。

○夕ぐれに帰とて くれに及て帰さま哀也。

○忘れては…… 忘れては夢かと思ひてさらうつつ、とは覚えず。

御位につき天下をもしり給へき御身のかく閑居の御すまひを雪ふみ

分て、見奉らんとは思もよらざりしと也。

○なく／＼きにけり 哀をもよほして帰也。

(第八四段)

八十四

昔男有けり。身はいやしなながら、母なん宮なりける。その母、なが岡といふ所に住給ひけり。子は京に宮づかへしければ、まうずとしけれど、しば／＼えまうです。ひとつ子にさへ有ければ、いとかなしうし給ひけり。さるにしはすばかりに、とみの事とて御文あり。をどろきてみれば歌あり。

古今老ぬればさらぬわかれの有といへばいよ／＼見まくほしき
君哉

かのご、いたううちなきてよめる

世中にさらぬ別のなくも哉ちよもと祈る人の子のため

八十四 身はいやしなながら 業平の事也。

○は、なん宮成ける 業平のは、は桓武天皇御むすめ伊豆内親王

也。

○子は京に宮づかへ 業平は今の京にて宮づかへし奉る也。

○ひとつ子にさへ 伊豆内親王の御はらに業平一人也。

○かなしう 御めぐみふかきさま也。

○とみの事 頼の字也。いそぎの事也。

○おどろきてみれば 業平のおどろきて也。

○おみぬればさらぬ別の…… さらぬわかれは無常のならひ、えさらぬ道也、今は、の御としもよりたれば、殊にたのまれぬほどに、

いよ／＼業平を見たきと也。

○世中にさらぬわかれの…… 我身ひとつのうへはなげかずして、

世中へかけていへる也。死すると言事のなくてあれかし、世中の子

たる物のためによからんと也。又我事もこもれり。

(第八五段)

八十五

昔男有けり。わらはよりつかうまつりける君御ぐしおろし給てけり。む月にはかならずまうでけり。おほやけの宮づかへしければ、つねには、えまうでず。されどもとの心うしなはで、まうでけるになん有ける。昔つかうまつりし人ぞくなるせんじなるあまた参りあつまりて、む月なれば、ことだつとておほみき給ひけり。雪こほすがごとふりて、ひねもすにやます。みな人あひて雪にふりこめられたりといふを題にて歌ありけり。

京思へ共身(こしむ)をしわけねはめかれせぬ雪のつもるそわが心なると、よめりければ、みこいといたう哀がり給ふて、御ぞぬぎて給へりけり。

八十五 わらははより わらはよりつかうまつりといふを、業平の事といふは不_レ用。これたかの若くまします時よりつかへし也。業平はこれたかに年汁ばかりまされり。

○ぞくなる 俗人(ぞく)也。

○ぜんじなる 法師(ほうし)也。

○ことだつ 正月なればひきつくるひ祝言する也。

○思へどもみをしわけねば 思へ共と言五もしは、思へどもくとふかく言心也。京に宮づかへすれば身をわくる事のならねば、いとまを申京へ帰んと思へば、雪のふりてかへさじととむるは、真実有がたきと思ふ心のする事也と言心也。

(第八六段)

八十六

昔いとわかき男、若き女をあひいへりけり。をの／＼おや有ければつ、みていひさしてやみにけり。年比へて女のもとに猶心ざしはたさんとや思ひけん、男歌を讀(よみ)てやれりける

新古今今迄に忘れぬ人は世にもあらじをのがさま／＼年のへぬれば

とて、やみにけり。男も女もあひはなれぬ、宮づかへになん出にける。

八十六 心ざしはたさんとやと思ひけん 昔の思ひをとをしとげんと言也。女、誰共なし。

○今までに忘ぬ人の…… 若時(わかとき)いひかはせしも年月へただりて、そなたには忘有べし、我は忘ぬと也。

○とてやみにけり かやうにはいひたれども、契もかはさず有し也。

1、「へただりて」は「へだたりて」とあるべき。